

# ゐでのしがらみ「薄可毛」考

小 伏 志 穂

萬葉集卷第十一の寄物陳思歌に、「しがらみ」に寄せる歌がある。

玉藻苅 たまもすゐ 井堤乃四賀良美 いでののしがらみ 薄可毛 うすこも 恋乃余杼女留 こひのよとめ 吾情可聞 わがこころか

(二七三二)

第四句に「恋の淀める」とあり、集中では稀にみる停滞さみの恋を歌った作である。

小稿では、特に第三句「薄可毛」の従来の解釈に対する疑問から、「薄」字について考察し、当該歌に対する私見を述べてみたい。

一

まずこれまでの注釈書の解釈を整理すると、大きく分けて次の三説となる。

- (1) しがらみが薄くて水の漏れることを恋が世に漏れたことに転じ、「恋の淀める」は、恋しさが満ち溢れる意にとる。
- (2) しがらみが薄いように相手の情が薄いからこの恋が停滞してい

る、と理解する。

- (3) しがらみが薄いようにこの恋の障害も少なく、かえって激しい気持ちになれずに中だるみ気味になっている、ととる。

以下、(1)説から順に検討してゆく。

まず(1)説であるが、この説の言うように「しがらみ」から水の漏れることを恋が世にもれたことに転じて歌う例は、集中には見られない。そこで時代を下って用例を求めると、

思ひ堰く心中のしがらみも堪えずなりゆく涙川かな (『千載集』  
十二、恋歌二・七六九／藤原親盛)

という後世のものが指摘できる。しかし当該万葉歌をも、このように理解することが認め得るであろうか。

「しがらみ」とは、『三才圖會』(器用十卷、二十二ウ)に

水柵ハ排シ木ヲ障ル水ヲ也。若シ溪岸稍深田在リテ高處ニ水ノ不レレ能  
及フコトニテハ溪ノ上流ニ作レテ柵ヲ過シ水ヲ使ニ之ヲ旁ニ出ニ下漑以テ及ニ

田所<sup>一</sup>

と説明されているように、水流を止めてその流れの一部を傍らから出し、田に水を引くための灌漑装置である。「倭訓栞」には

る杭など打つ、けて横さまに竹木などからみつくるをいへり

とある。この形態は、杭に横木を渡して堰を設け、そこから水の漏れ出す図を付している『三才圖會』にも適う。この装置は流れを妨げているだけで、塞き止めて流れなくするものではない。水は流れてはいるのだが、障害物があるせいでそこで進行が妨げられ、ゆるやかに、停滞するのである。萬葉集中の「しがらみ」使用例を確認してみよう。

明日香川 しがらみ渡し 塞かませば 流るる水も のどにか

あらまし へに云ふ、「水の 淀にかあらまし」(二・一九

七「明日香皇女木甕殯宮之時、柿本人麻呂作歌一首」の第一反歌)

しがらみを渡して塞けば、流れる水もゆったりとあつただろうにという。これは、しがらみを渡された水が、表面は止まっているかのようにゆるやかに見える様子を捉えた表現である。

また、当「明日香皇女殯宮挽歌」は、皇女の早逝を同じ名をもつ

明日香川に寄せて悼んでの作である。川の流れをゆるやかにする「しがらみ」の機能に、死期の訪れもゆるやかであれば良いのにと

いう思いが託されている。ところが、同じく人の死に寄せて詠んだ後世の和歌に目を転じると、

瀬を塞けば淵となりても淀みけり別れを止むるしがらみぞなき

『古今集』十六、哀傷歌・八三六／壬生忠岑

が見える。ここでは、「しがらみ」が死という永遠の別れさえも止めてしまえるとの理解にたつて作歌されている。このように後世の和歌において「しがらみ」は、その存在によって流れが完全に塞き止められることを下敷きにして歌い込まれ、歌語としての定着をみる。「しがらみ」が流れを滞らせる——塞き止める——ものであるという機能の一面を捉えての歌作がなされてゆくのである。

(1)説の解釈は、このような後世の和歌の影響を受けた理解に拠るものと思われる。よつて当該万葉歌について、「しがらみ」は流れを塞き止めるものであるがその力が薄弱である故に水が漏れ出す、という後世的な捉え方に基づいた解釈は従い難い。

また、「恋の淀める」を恋しさが満ち溢れると解釈することにも、無理がある。「淀む」は、

落ち激ち 流るる水の 岩に触れ 淀める淀に 月の影見ゆ

(九・一七二四「辛 芳野離宮 時歌二首」の第二首)

と水の流れが滞ることである。人事に関しては

吉野川 行く瀬の早み しましくも 淀むことなく ありこせ

ぬかも(二・一九「弓削皇子思<sub>レ</sub>紀皇女御歌四首」の第一首)と歌われているように、躊躇して停滞する、男女関係が思うように進まない意である。停滞しますます蓄積されてやがて溢れる意、とは捉えられない。

次に、「しがらみ」を相手の心の有り様を譬えたものと理解する(2)説である。これについては、集中の「しがらみ」使用例から検討しよう。集中に見られる「しがらみ」は先に挙げた「明日香皇女殯挽歌」の他に、次の二例がある。

明日香川 瀬々に玉藻は 生ひたれど しがらみあれば なび  
きあへなく(七・一三八〇/譬喩歌・寄<sub>レ</sub>河)

明日香川の玉藻がしがらみに邪魔をされて靡き寄れないように、作者の恋にも障害があつて相寄ることができないという。また、

我妹子に 我が恋ふらくは 水ならば しがらみ越して 行く  
べく思ほゆ(或本の歌の発句に云はく、「相思はぬ 人を思は  
く」)(十一・二七〇九/寄物陳思)

と、障害を乗り越えてしまいうらい恋しく思つていとも歌われている。これら恋の歌において「しがらみ」は、二人の障害となるもの(第三者)の譬えとして用いられている。

したがって、「しがらみ」を相手(当事者)の心の状態と捉える(2)説も従い難い。

(3)説は、こうした集中使用例同様に「しがらみ」を恋の障害物と理解し、それがほとんどないのでかえってあまり激しくは思われな、と恋の中だるみの心情を捉えている。この解釈では、恋が停滞している理由として

①障害が少ないから(＝乗り越えるべきものがなく、かえって気持ち上がらないから)

②自分の心が情熱不足になつていから

の二つを並べて提示してることになつてしまふ点で、疑問が残る。当該歌同様に疑問表現を併記した歌は、次のようなものが見られる。

我妹子を いざみの山を 高みかも 大和の見えぬ 国遠みか  
も(一・四四「石上大臣從駕作歌」)

大和が見えない理由として、山が高い(視界が遮断されている)せいか、国が遠い(空間的に非常に離れている)せいかと歌う。

まそ鏡 照るべき月を 白たへの 雲か隠せる 天つ霧かも  
(七・一〇七九/詠<sub>レ</sub>天)

ここでは、照るはずの月が見えないのは雲が隠しているからか、それとも霧が出ているせいかと疑う。また

さ雄鹿の 胸分けにかも 秋萩の 散り過ぎにける 盛りかも  
去ぬる(八・一五九九「大伴宿禰家持秋歌三首」の第三首)

では、秋萩の散つてしまつた原因を、雄鹿が胸で押し分けたためか、あるいは盛りが過ぎたためかと二つの案を疑問として提示している。

つまり、鹿に散らされた（外からの力による）のか、萩自身が衰えたのか、と「散り過ぎにける」原因を別のところに求めているのである。このように右の例では、併記されている二件が、各々独立した別件であるといえる。

ところが当該歌を(3)説のように理解すると、恋の停滞理由として挙げられた第一案「障害がなく、かえつて燃え上がらないから」は、第二案「自分の心のせいである」と重なってしまう。特にこれといって邪魔する者もなく、周りも何となく見逃してくれる、そのような逢おうと思えば逢える状況にあつて恋が停滞してしまうのは、作者自身の心が情熱不足に陥っているからである。このことを「我が心かも」と並べて歌つたと解釈する点で、(3)説も従い難いと思われる。恋が停滞する理由として歌い出された事柄の一方が「我が心かも」と作者の心の内にあるものならば、それと併記されるものは、作者にとって自分ではどうしようもない外的な問題であるのが自然ではなからうか。

以上に見たように、従来の解釈はいずれも首肯し難いものである。

## 二

そこで、かつて『私注』が当該歌第三句の語釈で

「薄」は「迫」に通ずる文字で、書經の外薄四海の薄、薄暮海の薄などもそれであるといふ。正宗氏總索引はセマリの訓を出して居る。シガラミの水を塞くのを、戀愛關係を塞くに言ひかけたのである。ウスミカモでは、序のつづきも説明出來ず、一首としても意をなさない。

と述べて「井堤の柵せけばかも（井堰の柵の如く、人が塞きとめればであらうか）」と、先に小稿で疑問点を指摘したどの注釈書とも異なる理解を示したことに注目したい。この「私注」説は、「薄」の漢籍での用例として示されたものが「及び迫る」意で、当該歌の文脈においてはやや不自然であると思われ、従い難い。しかし、「薄」が「迫」と通じるとの説明は、その具体例は後に挙げるが、納得できるものである。よつて小稿においてもこのような「私注」の手法を参考にし、「薄」字の意を再検討する方向から「薄可毛」の訓と解釈を考えてみたい。

「薄」は、集中歌では仮名に用いられた場合を除いて当該歌の他五例見られ、すべて「うすい」意で用いられている。

我が背子が 着衣薄けりきよゆし 佐保風は いたくな吹きそ 家に至るま

で(六・九九)「大伴坂上郎女与「姪家持従」佐保」還「帰西宅」  
歌一首」

いとのかきて 薄<sup>うす</sup>寸<sup>すん</sup>眉<sup>まゆ</sup>根<sup>ね</sup>乎 いたづらに 搔<sup>か</sup>かしめつつも 逢<sup>あ</sup>は  
ぬ人かも(十二・二九〇三)「正述心緒」

など、衣や眉を「薄い」と形容する。また

朽網山 夕居る雲の 薄<sup>うす</sup>往<sup>い</sup>者 我は恋ひむな 君が目を欲り

(十一・二六七四)「寄物陳思」

と「薄くなる」という動詞形も見られる。

また、日本書紀・続日本紀・懷風藻においても、その意は「うす  
い」と理解できる使用法がほとんどである<sup>⑥</sup>。

しかし、「薄」に対応する訓が「ウスシ」のみではなかったこと  
は、「観智院本類聚名義抄」(僧上二十八、七・二十九、一)に「ウ  
スシ」に続いて

コ、ニ・ヤセタリ・セメ(マ)ラル・イタル・ハク

などをはじめ、二十五の訓が提示されていることから明らかに明らかである。このように幅広い意味を以て捉えられていた「薄」の様子を、  
漢籍中でも特に百五十以上と数多い使用例が見られる『文選』<sup>⑦</sup>によつて確認してみたい。

まず、万葉歌同様「うすい」ことを指すために用いられている例  
として、次のようなものがある。

薄<sup>うす</sup>帷<sup>い</sup>、鑑<sup>か</sup>明月<sup>めいげつ</sup>、清<sup>せい</sup>風<sup>ふう</sup>、吹<sup>ふ</sup>我<sup>われ</sup>袷<sup>あし</sup>袴<sup>かほ</sup>(二十三、阮嗣宗「詠懷詩  
十七首」一)

「薄いとばかりが明月に照らされて、清風は私の衿もとまで吹いて来  
る」

薄<sup>うす</sup>香<sup>かう</sup>之<sup>の</sup>炙<sup>い</sup>(三十四、枚叔「七發八首」)

天下の美味を言い並べたところに、「薄切りの獣の背肉のあぶり物」という。また、同じく「うすい」意であるが心情にかかわって用いられている例が見られる。

養<sup>やし</sup>隆<sup>りゆう</sup>敬<sup>けい</sup>薄<sup>はく</sup>、惟<sup>ただ</sup>禽<sup>いん</sup>之<sup>の</sup>似<sup>に</sup>似<sup>に</sup>似<sup>に</sup>(十九、東廣微「補亡詩六首」

一)

ここでは、「養うだけで敬いが薄いのは、鳥と同じである」と、愛して敬せざる心持ちを「薄」を以て表現している。

主<sup>しゅ</sup>父<sup>ふ</sup>宦<sup>くわん</sup>不<sup>ふ</sup>達<sup>たつ</sup>、骨<sup>こつ</sup>肉<sup>にく</sup>還<sup>かへ</sup>薄<sup>はく</sup>、(二十一、左太冲「詠史八

首」七)

「主父は、仕官はしていたが栄達せず、身内の者も彼を侮っていた」と、心情に關して「薄」であるというときは、軽んじ、侮ることを指す。

每<sup>おの</sup>非<sup>ひ</sup>湯<sup>たう</sup>武<sup>ぶ</sup>而<sup>に</sup>薄<sup>はく</sup>、周<sup>しゅう</sup>孔<sup>こう</sup>(四十三、嵇叔夜「与山巨源絶交  
書一首」)

「常に殷の湯王、周の武王を非難し、周公や孔子を軽蔑している」

また、右のような「うすい」意以外での使用も見られる。以下、李善の注記に従って用例を掲出する。

・叢（くさむら、しげみ）

搜<sup>レ</sup>林<sup>ヲ</sup>索<sup>シ</sup>險<sup>ヲ</sup>、探<sup>レ</sup>薄<sup>ヲ</sup>窮<sup>ム</sup>阻<sup>ヲ</sup>。（三十四、曹子建「七啓八首」

四）

狩獵について述べているところで、「林の中や険しい所、また草むらなどをくまなく搜し求める」という。李善注に「廣雅曰：草萊生曰薄」とあり、「薄」は草むらの意で用いられているとわかる。

谷風<sup>ハ</sup>拂<sup>ヒ</sup>脩<sup>キ</sup>薄<sup>ヲ</sup>、油雲<sup>ハ</sup>翳<sup>リ</sup>高<sup>キ</sup>岑<sup>ヲ</sup>（二十六、陸士衡「赴洛二首」一）

これも「薄」は草むらを指し、「谷風は長く伸びた茂みを揺さぶる」意。

・迫（せまる）

殺<sup>シ</sup>武<sup>ヲ</sup>孔<sup>テ</sup>猛<sup>キ</sup>、袒<sup>シ</sup>楊<sup>ヲ</sup>身<sup>ヲ</sup>薄<sup>ル</sup>。（三十四、枚叔「七發八首」）

李善注に「孔安國尚書傳曰：薄、迫也」とある。「強くて勇ましい者が肌を脱いで（袒楊）迫って行く」と使用されている。

文軫薄<sup>リ</sup>桂<sup>海</sup>、馨<sup>ク</sup>教<sup>燭</sup>冰<sup>天</sup>（三十一、江文通「雜体詩三十首」

袁太尉「淑」從駕）

ここでも「薄」は迫る意で、「文字や車が桂の茂る南海まで及

んでいる」という。

・附（つく）

激楚<sup>、</sup>佇<sup>蘭</sup>林<sup>、</sup>回<sup>芳</sup>、薄<sup>秀</sup>木<sup>、</sup>（二十二、陸士衡「招隱詩一首」）

李善注は「王逸楚辭注曰：薄、附也」という。「風に漂う香氣（回芳）は、美しい木々（秀木）の方まで香って行く」

拙疾<sup>相</sup>倚<sup>薄</sup>、還<sup>得</sup>、得<sup>レ</sup>、靜<sup>者</sup>、便<sup>、</sup>（二十六、謝靈運「過始寧

墅一首」）

始寧の風物に感じ、退官したあととここで暮らしたいと歌う作。李善注に「韓康伯周易注曰：薄、謂相附也」とある。「宮仕えのつたなさと病（拙疾）が寄り合って（倚薄）、還って山水を好む靜者となった」という。

・泊（とまる）

薄<sup>リ</sup>霄<sup>ニ</sup>愧<sup>テ</sup>雲<sup>ヲ</sup>浮<sup>ル</sup>、棲<sup>ハ</sup>川<sup>ニ</sup>作<sup>テ</sup>淵<sup>ヲ</sup>沈<sup>ル</sup>（二十二、謝靈運

「登池上樓一首」）

李善注には「王逸楚辭注曰：泊、止也。薄與泊同、古字通」という。「薄霄」で中空に止まる意。「中空に止まっても雲の浮かぶ高さに及ばず、川に棲んでも淵の深さには及ばない」

曲<sup>汜</sup>、薄<sup>停</sup>旅<sup>、</sup>通<sup>川</sup>、絶<sup>行</sup>舟<sup>、</sup>（二十五、謝惠運「西陵遇

風獻康樂一首」其四）

ここでも「薄」は泊まる意で、「川のよどみ（曲汜）あたりに

船(停旅)をつないである」という。

以上、現在では一般に「うすい」とのみ理解されている「薄」字が、当時はさまざまに使用され、またそれを了解して読み取っていたであろうことを確認した。

ここでは、「ゐでのしがらみ 薄可毛 恋の淀める」という文脈における「薄」字の使用法を考えている。そこで、「しがらみ」が水の流れを停滞させるものであることから「泊、止」と同義とする使用に注目したい。

「薄」を「とまる」意で使用しているのは、右の二例の他に次のようなものが見られる。

頭<sup>レ</sup>棹<sup>ヲ</sup>薄<sup>リ</sup>枉<sup>レル</sup>渚<sup>ニ</sup> 指<sup>シテ</sup>景<sup>ヲ</sup>待<sup>ツ</sup>樂<sup>ノ</sup>關<sup>ヲ</sup> (二十、謝靈運「九日從<sup>ニ</sup>宋公戲馬臺集<sup>ニ</sup>送<sup>ニ</sup>孔令<sup>ニ</sup>詩一首)

重陽の節、宴での作である。「棹をひかえて入り江に舟を止める」と、停泊することを「薄」で表現している。

去<sup>リ</sup>郷<sup>ヲ</sup>離<sup>レテ</sup>家<sup>ヲ</sup>兮來<sup>リテ</sup>遠<sup>ク</sup>客<sup>シ</sup> 超<sup>カニ</sup>追<sup>遥</sup>兮今焉<sup>ニ</sup>薄<sup>ル</sup> (三十三、宋玉「九辨五首」二)

「国や家から離れ遠く旅し、遙々さまよって何処に泊まれば良いものやら」誠を尽くしたが逆に退けられ、嘆きながら漂泊する。ここでの「薄」は宿り泊まる意である。

李善注に言う「薄」と「泊」との通用は、同音によるものである

う。この二者の通用例として、次のようなものを指摘することができる。

日落<sup>チ</sup>當<sup>ニ</sup>樓<sup>薄</sup> 繫<sup>ク</sup>纜<sup>ヲ</sup>臨<sup>メル</sup>江<sup>ニ</sup>樓<sup>ニ</sup> (『文選』二十五、謝靈運「登<sup>ニ</sup>臨海嶠<sup>ニ</sup>初發<sup>ニ</sup>疆中<sup>ニ</sup>作與<sup>ニ</sup>從弟惠連<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>羊何<sup>ニ</sup>共和<sup>レ</sup>一首)

酒肆<sup>ハ</sup>或<sup>シ</sup>淹<sup>留</sup> 漁潭<sup>ハ</sup>屢<sup>ニ</sup>棲<sup>泊</sup> (『全唐詩』二百一十一、高適「淇上酬<sup>ニ</sup>薛三據<sup>ニ</sup>兼寄<sup>ニ</sup>郭少府微<sup>ニ</sup>」)

「棲薄」「棲泊」は、いずれも宿り泊まる意で、

汝穎<sup>之</sup>士<sup>ナリ</sup>。流<sup>シ</sup>離<sup>レ</sup>世<sup>故</sup>、頗<sup>ル</sup>有<sup>ニ</sup>飄<sup>薄</sup>之<sup>歎</sup>。 (『文選』三十、謝靈運「應場」序)

下亭<sup>ニ</sup>漂<sup>泊</sup>、高橋<sup>ニ</sup>羈<sup>旅</sup> (『庾子山集』一、庾信「哀江南賦」序)

の「飄薄」「漂泊」はさまざまのことで、同義である。

このような「薄」と「泊」との関係は、万葉人も知り得ていたことであろう。

### 三

では、前節にみたように当該歌の「薄」字を「泊」に通じ「止」と同義であると理解するときの、「薄可毛」の訓について考えたい。まず「可毛」は、詠嘆・疑問・反語・願望などを表すとされる助

詞「かも」である。主に体言・活用語の連体形に接続する。「薄かも」は短歌第三句であるから五音節に訓んで、

・・・さ夜更けて 行くへを知らに 我が心 明石の浦に 布

衿等米呂<sup>ねとめて</sup>・・・(十五・三六二七「属物發思歌一首」)

うちひさす 宮に行く児を まかなしみ 留者苦<sup>とまれはくも</sup> 遣ればすべ

なし(四・五三二「大伴宿奈麻呂宿衿歌二首」の第一首)

洪谿を さして我が行く この浜に 月夜飽きてむ 馬之末時<sup>うましまし</sup>

停息<sup>とどめ</sup>(十九・四二〇六「還時、浜上仰見月光歌二首」大伴家

持)

などある下二段活用動詞「とむ」の連体形として「とむるかも」の試訓を示しておく。

よって一首は

玉藻刈る めでのしがらみ 止むるかも 恋の淀める 我が心

かも

と訓んでおきたい。

「かも」は「——は——である」という判断文について詠嘆的な疑問を表す働きをする。

馬並めて 高の山辺を 白たへに にははしたるは 梅の花か

も(十・一八五九「詠花」)

秋風の 吹き漂はす 白雲は 織女の 天つ領布かも(十・二

#### 〇四一／七夕)

山辺を白く彩っているのは梅の花であろうか、白雲は織女星の領布であろうか、という。このような歌がこの例にあたる。また

我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の 流れ来るか

も(五・八二二「梅花歌三十二首」大伴旅人)

も判断文の変形と考えられ、「天から雪が流れて来るのだろうか」

という疑問の意と理解できる。「めでのしがらみ止むるかも」もこのような判断文の変形の一つと考えられ、同様に「しがらみが止めるのであろうかなあ」といったふうな、詠嘆的な疑問であると捉えられよう。

「めでのしがらみが止めるのであろうか。恋が停滞している。私の心であらうか。」恋が中だるみになっていることを、障害があつて妨げられているのか、自分の気持ちの有り様なのかと疑問を併出している。一般に話し手が真実と思う方を後ろに置くということも考慮すれば、当該歌は、本当は作者自身が情熱不足になっていると自認している恋について、「邪魔があるせいかなあ」などとおぼめかして歌った趣の作であらう。

#### 四

最後に、「止」の意を表すために「薄」を用いた、当該歌の表記



意図を確認しておきたい。

萬葉歌において「止」の意を訓字表記する場合、選ばれている文字は一般に

留<sup>とどま</sup>不得<sup>ぬ</sup> 命にしあれば きたへの 家ゆは出でて 雲隠りに

き(三・四六一)「七年乙亥大伴坂上郎女悲歎尼理願死去」作歌

一首」の反歌)

秋萩に 置きたる露の 風吹きて 落つる涙は 留<sup>とどめ</sup>不勝<sup>か</sup>都毛

(八・一六一七)「山口女王贈大伴宿祢家持」歌一首)

鳴る神の しましとよもし 降らずとも 吾<sup>わ</sup>将留<sup>はしまらむ</sup> 妹留者<sup>いもしとどめ</sup>(十

一・二五二四)問答)

などに見られる「留」である。それぞれ、命を、涙を、また帰ろう

とする人を、引き留めることを表現している。そして馬を止める場

合は

さ檜隈 檜隈川に 駐馬<sup>まゑま</sup> 馬に水かへ 我外に見む(十二・三

〇九七)寄物陳思)

と「駐」の字を、船には

秋風に 川波立ちぬ しましくは 八十の舟津に 三船停<sup>みねとどま</sup>(十・

二〇四六)七夕)

と「停」を用いている。「薄」と通用と考えられる「泊」は、歌中

では

大船の 泊流<sup>はつら</sup>登麻里能<sup>とまりの</sup> たゆたひに 物思ひ瘦せぬ 人の児故

に(二・一三二)「弓削皇子思紀皇女御歌四首」の第四首)

我が船は 明石の水門に 榜泊<sup>こぎはて</sup>牟<sup>も</sup> 沖辺な離り さ夜更けにけ

り(七・二二二九)羈旅作)

など、「はつ」と訓まれ、また名詞形で

眉のごと 雲居に見ゆる 阿波の山 かけて漕ぐ船 泊<sup>とまり</sup>不知毛<sup>しずも</sup>

(六・九九八)「春三月、幸于難波宮」之時歌六首」の第二首／

船王)

と停泊地の意で「とまり」とも訓まれる。題詞では

從<sup>つ</sup>珠洲郡<sup>しず</sup>發<sup>は</sup>し船、還<sup>かへ</sup>太沼郡<sup>たぬま</sup>之時、泊<sup>とど</sup>長浜灣<sup>ながはま</sup>、仰<sup>あや</sup>見月光<sup>みづか</sup>

作歌一首(十七・四〇二九題)

十二日、遊覽布勢水海、船<sup>ふ</sup>泊<sup>とど</sup>於多祜灣<sup>たか</sup>、望<sup>のぞ</sup>見藤花<sup>ふじ</sup>、各

述<sup>の</sup>懷<sup>おも</sup>作歌四首(十九・四一九九題)

が見られ、いずれも船を停泊させることを表現したものである。

右に見たように、集中では「止」を表現するとき、その内容に應

じて「留」「駐」「泊」などを使い分けている。しがらみが流

れを妨げることを言うにあたって「泊」に通じる「薄」を使用した

のは、これが船が停泊するときなどの一時停止を指す語と捉えられ

ていたからであろう。しがらみが流れを止めるのは、先に見たよう

に方向を変えるためである。ここで、引き止めて留まらせ、移動さ

せない場合に使用される「留」を用いるのは相応しくない。やはり「泊」が適当であろう。

さらに、「泊」でも表現し得るところを取って「薄」としたのは、杭に草木を交錯させて作る「しがらみ」の様子と「薄（しげみ）」とが共通のイメージをもっていたためでもあろうか。あるいは、当該歌終句の「吾情可聞」との対応からではなからうか。

いま一度当該歌の表記を見てみよう。

玉藻苜 井堤乃四賀良美 薄可毛 恋乃余杼女留 吾情可聞

仮名表記と訓字表記とが併存する中、「かも」による疑問として併記された「薄」「吾情」は共に訓字である。「薄」が人の心情に關して「軽んじる」気持ちを表すために使用されていることは、先に『文選』の用例で確認した。また特に恋に係わっては「相手への思いやりが浅い」意で用いられると言える。その例として、万葉集左注に次のようなものを指摘できる。

右、伝云、時有三所レ幸娘子也（壁妻許）。寵薄之後、還賜寄

物一 （壁妻、可美）。於是娘子怨恨、聊作三斯歌一献上。（十六・三八〇

九左）

右一首、藤原宿奈麻呂朝臣之妻石川女郎薄レ愛離別、悲恨作歌

也。（昔年去許）。（二十・四四九一左）

男女間の愛情が衰えたことを「寵薄」「薄愛」と表現している。

同様の「薄」の使用は、『玉台新詠』<sup>8)</sup>にも見られる。

寄レ身ヲ雖モ在レ遠キ 豈ニ忘レ君ヲ須臾ニ 既ニ厚シ不レ爲レ

薄シ（一、徐幹「室思一首」六章）

留守居の妻の情を述べた作である。「遠くにいるけれどもあなたことは東の間も忘れたことはなく、薄情な思いを抱いたこともない」と「薄」字を使用して心情を述べている。

誰カ言フ去婦ハ薄シ 去婦ハ情更ニ重シ（二、劉勰妻王宋「雜詩二首」

其二）

序によれば、王宋は劉勰に嫁いで二十余年になるが、夫が他の女性を気に入り、また子無きを以て去ることとなった。「去婦は薄情であるなどと誰が言うのでしょうか、去婦こそ思いやりは深いのです」と去り難い思いを叙したものである。

慎ミ勿カ爲レ婦ヲ死ス 貴賤情何ノ薄キ（一、「古詩 爲ニ焦仲

卿妻一作）

無名氏作の叙事詩で、流転するうちに多くの詩人の手が加わったものと言われる。小役人焦仲卿の妻蘭芝は、夫の母に追い出された。夫婦は互いに復縁を誓って別れたが、蘭芝は実家の者に強いられ、やむなく仲卿より身分の高い太守との再婚を決める。これを知った仲卿は死を決意し、母に暇を告げる。「嫁のために死ぬなどおやめなさい。身分の貴賤で出たり行ったりと、なんて薄情な女なのでは

う」と、ここでは「情」が「薄」であるという用法が見られる。右のように恋情が深くないことを「薄」を以て表現する作が見られることから、当該歌の「薄」字も、あるいは「吾情」が「薄」であるということからの連想が働いての用字ではないかと思われる。

【注】

①このように解釈する注釈書に、代匠記（初・精）・考・略解・古義・口訳・全釋・総釋（春日）・佐佐木評釋がある。

②窪田評釋・大系。

③注釈・全集・集成・新編全集・釋注。

④以下、八代集の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）に拠る。

⑤さくらちる水のものにはせきとむる花のしがらみかくべかりけり

（『千載集』二、春歌下・九九／能因法師）

ちりか、る紅葉ながれぬ大井河いづれ井堰の水のしがらみ（『新

古今集』六、冬歌・五五五／大納言経信）

などが見られる。「明日香皇女殯宮挽歌」の「しがらみ」のようにスムーズな流れを妨げるものという捉え方ではなく、流れを遮るといふ機能の一面を取り上げて作歌している様子がかがえやう。また

もらさばや思ふ心をさてのみはえぞ山城の井手のしがらみ（『新

古今集』十二、恋歌二・一〇八九／殷富門院大輔）

は万葉歌を下敷きにした作であろう。「もらさばや」と歌い出すのは、万葉歌の「しがらみ」がすでに「薄くて水の漏れるもの」と認識されていた故かと思われる。

⑥使用例の一部を挙げると、次の通りである。

『日本書紀』には、

我が氣長足姫尊、新羅にして何ぞ薄くしたまひし。（欽明天皇二十三年六月）

とある。「新羅に対して薄い待遇をする」また

王師を以て薄め伐ちて、天罰をも襲み行へ（雄略天皇九年三月）  
という例も見られ、この「薄」の訓は新編全集本頭注に拠れば、

「ココニ（助字）」「セメル（迫る意）」の二説がある。

『続日本紀』では、

朕、薄徳を以て忝くも重き任を承けたまはる。（聖武天皇・天平十三年三月）

など、薄い徳を以て恭しく任を果たしている、と謙辞に用いられるものも多く見られる。

『懷風藻』には

余薄官の餘間を以ちて、心を文囀に遊ばす。（序）

「薄官」で地位の低い官吏のこと。また

津の逆を謀るに及びて、鳥則ち變を告ぐ。朝廷其の忠正を嘉みずれど、朋友其の才情を薄みず。議する者未だ厚薄を詳らかにせず。

(河島皇子伝)

では心情に対して「薄い」と言う。

⑦他に、

ハナス・キ・アナツル・ス、シ・スクナシ・タヒラカナリ・サム・イヤシム・トツム・マレナリ・ツク・アツム・クダル・キハム・ツラシ・オホフ・ヤウヤク・フムタ・ハシメ・ス、キ・エラヒが挙げられている。

⑧以下、「文選」の引用は、全釈漢文大系(集英社)に拠る。

⑨引用は、「全唐詩」(中華書局出版)に拠る。

⑩引用は、四部叢刊第一期集部『庚子山集』に拠る。

⑪これまでの調査では、前述の『名義抄』の他「九条本文選」においても「薄」に対して「トドム」の訓を与えていることを確認している。しかし「薄可毛」を五音節で訓む必要上、同義の「トム」を採った。

⑫同じ「梅の花かも」という句でも

うつたへに 鳥は食まねど 繩延へて 守らまく欲しき 梅の花かも (十・一八五八/詠花)

は、「守ってやりたい梅の花であるよ」と詠嘆の用法である。

⑬但し

我が苑の 李の花か 庭に散る はだれのいまだ 残りたるかも  
(十九・四一四〇「天平勝宝二年三月一日之暮、眺<sub>二</sub>隔春苑桃李花作<sub>二</sub>首」の第二首/大伴家持)

は特例で、新編全集頭注に「散った「李の花」のほうが実景と思われ、作者は新しい表現を試みたのでなかるうか」と言う。

⑭但し

家離り います我妹を 停<sub>とどま</sub>不得 山隠しつれ 心どもなし(三・四七一「悲緒未<sub>レ</sub>息、更作歌五首」の第二首/大伴家持)

は例外で、行ってしまう妻を止めることを述べる際にも「停」を用いている。

⑮引用は、新釈漢文大系(明治書院)に拠る。

⑯集中には、

佐保川に 凍り渡れる 薄ら水の 薄き心を 我が思はなくに  
(二十・四四七八「大原桜井真人行<sub>二</sub>佐保川辺<sub>一</sub>之時作歌一首」)  
という作も見られる。仮名書き例ではあるが、「薄き心(宇須伎許<sub>二</sub>己呂<sub>一</sub>)」とあるのは、「薄情」なる漢語の翻読語ではないかと考えられる。このような例も、「情」が「薄」であると連想して表記する可能性を示唆するものではあるまいか。

なお、萬葉集の引用は、すべて新編日本古典文学全集（小学館）に  
拠った。

（こぶせ しほ／関西大学院生）